

海 (かいし) 市

No. 15

● 詩

- 02 前田 勉 降る
- 06 横山 仁 生活の柄 10

● 招待席

- 08 砂室 圭 岩木登山行

● エッセイ

- 18 片津 森 中岳にて
- 20 佐藤ただし 水田とツバメ (13)
- 23 横山 仁 雑記 (15)

降る

前田 勉

降る

降っている

朝から

大きな雪片が

時に妖艶に舞いながら

降りて来る

気紛れな風に乗り

思わぬところへひっそりと落ちては

そこで重なり合い

白

そのものになっていく

今日

この街は

すべてがモノトーン

道筋の杉木立も

黒の長い板塀も

薄灰色に点描されていた

町家まちやの向こう角から

列をなした人たちが歩いてくる

寒修行僧であつた

網代笠の縁から湯気立ち

両肩から垂れた黒いマントの裾が

左右に揺れている

あわせるように

肩のあたりから滑り落ちた雪の欠片が

その裾に振り払われて

散る

寒修行僧は

読経と共に通り過ぎ

かすかにリンの音ねを残して

その先の角を曲がって行った

降る

降っている

ただ見ているだけの

私の空から

何かに耐え切れないかのように

みんなみんな

降りてくる

生活の柄 10

横山 仁

T町・銀座通り商店街から車で約二時間、A町は山の麓にある。古びた記憶といえば、平安時代（八三〇）の天長地震。にぎわいも、川も、姿を変えた。

春先の早朝、路地に二十センチくらいの血を流した鼠の死骸があった。とりあえず穴を掘って埋めたが、家庭ごみだったか。以来、粘着式ネズミ捕りの鼠も、やたら大きくなっている。

暑い夏の日、路上で猫の死体をみることがある。道の真ん中で立ち止まったのか、まっすぐ道路の反対側に向かったのか。そういえば野良猫は、逃げる時、一度か二度、後を振り返り、立ち止まりながら逃げていく。

枯れ葉が散るのは夕暮れとは限るまい。老母は道路に落ちたイチヨウの葉を資源化物用袋に集めている。疲れると昼寝だ。

時に、長い冬の夜、白い柩が抒情詩のように宙から降りてくることがある。亡くなったのは、わたしか、次郎か。柩を載せた鹿島舟はどこへ向かうのかとみていると、時を告げる風の声がきこえてきた。

招待席

岩木登山行

砂室 圭

十月十五日の六時頃だったろうか、前日訪ねた阿仁の印象を鷹巢の友人に報告したいと思つて、私はなじみのスナックから電話をかけていた。その友人はうんうん聞いていたが、近々山に登るぞ、と不意に云つた。何処の山に登るのか、と私は尋ねた。彼は特別高ぶることもなく、「岩木山」とぼさつと答えた。何度となく下から見上げてゐる岩木山の雄姿を、私は目蓋に浮かべていた。

「この季節の山はいいだろうな」

「どうだ、登りたいか？」

「そうだなア、登りたいな」

私の中に、むらむらとこみあげてくるものがあつた。四十七才になつても登山には縁がなく、残念ながら千米クラスの山にはただの一度も登つたことがない。未知のものに対する興味は失つていないが、机に座つてゐるだけの私には土台無理な話だ。

「歩けないからなア。自慢じゃないが、山登りの経験なしだ」

私は云いながら気色ばつた。悪いことにその時、胃はそれなりにアルコールで満たされてゐた。あぶないぞ、と思つた。

「一晩泊まるんだ。母を連れてゆつくり登るから。おまえ、行きたけりや連れて行くぞ」

登るぞ！ 友人に誘ひ込まれ、思いもかけぬ返答をしてからも、私は実のところまだ迷つてゐた。登山行が私に可能であるとすれば、それはまつたく自身のペースで登る以外にないのだから、考えようでは気楽なはずだつた。友人の母は六十六才とのことだが、私とは少しばかり出来が違う。決意が私には必要だつた。私は、迷つたままその話を放置してゐたが、前々日になつて電話の彼から釘を刺され、明確に登ると返答

する破目になった。そして、なるようになるだろうと
考えて準備を始めたが、携行するシャツを選ぶ段に
なって、山の寒さに対する私の感覚は、まったく当て
にならない気がした。

※

十月二十二日、ついにその日になってしまった。握
り飯を六箇、自分で用意をして家を出たのは七時。心
もとないにしては元気にリュックを背にしており、決
心できないでいた割には無責任にはしゃいでいた。大
館発七時三十八分、鷹巣から乗った友達は窓から手を
振っている。寝袋、登山靴から靴下まで彼は用意して
くれていた。

「きつと雨雲が、後から追っかけて来るぞ」

津軽平野の突起と云える岩木山は、その頂上を雲で
かくしていた。天気予報は、南の方から崩れてくると
云うことだったが、何故か、私は雨にあたらぬ気が
した。

弘前着九時六分。バスターミナルでは発車寸前のバ
スがあった。街で時間を潰すよりはと、そのバスに乗る

ことにした。百沢の登りは時間がかかるし容易じゃな
い、と云う彼の言葉も、私の頭にはなかった。枝もた
わわな紅いりんごの樹をバスの窓から見たりしてい
るうちに、私は口笛吹かんばかりのいつもの極楽とんぼ
に変身、時間やその他のこともスムーズに行く方が当
然、というような適当な態度だった。

所要時間二十分ほどで着いた岩木山神社前では、水
を汲んだり、買物をしたり、トイレに寄ったりして準
備をし、出発したのは一時間ぐらい後の十時四十分で
あった。一向に雨になる気配はなく、光あふれるなだ
らかな雑木林の中の道をしばらく登ったが、見はらせ
る箇所などはなかった。延々と続く道に、岩木はやは
り高いのだなと変な形で感動し、そんな繰返ししが体内
に疲労を重ねていくようだった。

道は決して良いとは云えなかった。集中的に降った
雨が道を流れるのだらう、多くは掘られていたり崩れ
ていて、路肩を歩かねばならなかった。湿った地には
人の歩いた跡が残っているので、それを辿つてのばれ
ばいいわけだが、一応はそれぞれリュックを背負って
いるわけで、バランスを崩しかねない危険があった。

荷物と云えば、友人の背負つたりリュックはかなり大きなものだった。大きなそれは主に彼、彼の母が背負つてきた次に大きなリュックを私が。私のそれは小さかったので主に彼の母が背負つた。時々私は私も背負つてみたが、大きなそれは背中から離れて行きそうでバランスが悪く、重さが倍増する気がした。そうしているうちに、私が主に背負つていた彼の母のリュックの紐が切れてしまった。何かあれば彼の母が荷物にしのばせていた紐を足して、昔の人がやったみたいに背負つてみたが、彼の母が背負うみたいには私も彼も上手くは背負えず、二人とも持て余しがちだった。やがて、このリュックの荷を減らして、彼の母に専門に背負ってもらふことにした。

途中一度休んでいるが、昼が過ぎてもゆっくりと弁当を広げられそうな箇所は、相変わらず見つからなかった。一息ついては回りを見まわし、もう少しもう少しと気合いを入れて登ったが、身につかぬと云うか、それに適當する以上の疲れを覚えていた。一時半頃になつて、雨がぼつりと来た。木の間から空を見上げると、いつかすつかり雲におおわれていて、頂上と思わ

れる方角は霧がかすんでいる。崩れる一方だろう。ひどい降りにならぬのを祈りながら、時々ビニールを被つたりした。一足先を行った彼が、上で大きな声をあげた。

「営林署の小屋に着いたぞ」

雨が待つてたようにさあつと来た。どんな所か考えてみる暇もなく、三人はあわてて小屋にもぐり込んだ。一坪ほどの広さなので、顔つき合せていると云つた感じ。三人ともとなると、足を伸ばしてゆっくりとは休めぬ空間だった。営林署が見張り小屋として作ったもののように、非常電話を設けた跡があつた。

雨の降るのは不可抗力だし、腹の空くのも自然現象、仕様がなのだからと、狭さのなかで食事しようとすることになつた。ビニールを空間いっぱい広げて座り、足の間には食べ物を置いた。入口を少し開けると充分に光が入つて来、食べることには何の支障もないはずだったが、やはり、咽喉につつかえる気がした。この雨のなかをなお登れるかは判断できることではなかつたが、一時休まざるを得なかつたわけで、これだつた、と、ほつとしながら食べていた。

少しばかり元気になって、再び登りはじめたのは二時半過ぎ。雨は愚図々々していて、すっかり上がったわけではなかった。「四合目の山小屋に辿り着かなければ、眠る場所がないのだぞ」と云う彼の言葉に追われもし、支えられてもいた。敷物のビニールをかぶっていたが、外からは雨、内から汗といじめられては、立ち直った足どりも重い。衣服が濡れはじめて来た見え、汗をかいているのに少し寒いのである。

彼の母が遅れはじめた。私も立ち止まる回数が多くなる。私の気持に余裕が無くなり、彼の大きなリュックを「背負おうか」とは云い出せなくなっていた。「あと三十分ほどで山小屋」と云う彼の言葉にすがって、重い足を押しあげていたのだ。

「着いたぞ！」

割と近いところから、友人の声がした。一息にそこまで登ると、見晴せる広場があった。彼はそこで一点を注視し、荷を背負ったまま突立っていた。

「おかしいぞ。山小屋がない」

足もとを見ると、建物があったらしい跡が確かめられた。雪崩だろうか？ 取払ったのだろうか。おのれ

の中の何かが崩れて行くようで、私はリュックをすぐに取り出した。

ここに泊れないとすれば登るべきだろうか、それとも下るべきだろうか、と彼は、うずくまってしまった私に云う。当然ながら、私には見当がつかなかった。おのれの足に問うなら、ここに止どまるべきだが、それが駄目ならどちらも同じに思えた。上にある山小屋までには岩場が続き、夜のその道をいけるかどうかは不明だし、また、今までの時間をふりかえって見れば雨の中の下りも問題だった。

「おばあちゃんを頼むよ。悪いけど、少し休ませてくれ。どうするかは後で考えようよ」

彼は道を下に向かい、私は雨やどり出来そうな竹やぶを選んで、その陰にリュック二つを運び、その上にビニールをかけた。ひどくなりはしないが雨は止むふうもなく、それに風も少しは出て来たようだ。リュックの傍にうずくまり、荷の上のめくれ続けるビニールに手を置く。竹の葉に貯まった雨滴がこぼれて、私の頬に来た。時計を見ると三時過ぎて、山はもうすぐ闇に包まれるに違いない。退屈する間もなく、二人の話

し声が近づいて来た。

「おおい、ここだぞ」

一休みしたことで、私は元気になつていた。ここで戻るのはいはしいし、夜の岩場登りも無論自信があるとも云えないわけだか、素直に彼の経験に従えそうな気がした。着ているものが濡れて寒かったが、それは他の二人も同じ、声を出せるおのれであれば、引率する者の気持も私自身も楽だろう。登ると決まつて、一歩先を行くぞと私は、従いて来いと云わんばかりの勢いで腰をあげた。

雨のせいで道は暗くなりはじめたが、まだ充分に見分けられた。一步また一步と、足もとを確かめながらゆつくりと歩く。数分後のことだろうか。ふと明るいことに気づいて、目を上げると見晴しのきく箇所に出ていた。見回すと左手には、大きくはないがコンクリート造の建物。瞬間、それは確かに把握不能のものだった。

「おおいー」

私は大きな声をあげた。こんなところに建物があるなんて、と私は、ただそれだけを咀嚼しようとした。私の指差す建物を見て、遅れてきた友人はすぐにそれ

を山小屋だと判断し、気の抜けた声を出した。

「何だ、ここに移したのか」

少しの時間を経て私は、さして遠くない箇所に新しい山小屋を建て、古い山小屋は取り払つたのだということ、やつと把握することが出来たのだつた。

さて、そこに泊ると定めたら、やることはいっぱいある気がした。濡れた衣服は取りかえたいし、寒いので火を熾したいとも思ったが、どつちを先にすればいいのか判断出来なかつた。まずは頭をふき、汗と雨で濡れた下着を取りかえた。次に彼と二人で火を準備しようとしたが、取り込んできた湿つた木の細枝は、そのものが燃えてしまつても、囲炉裏のそばにあつた燃え残りの木には火が付かなかつた。二人の努力は、ただただ建物のなかを煙らせただけだったのだ。

六時頃、男子高校生が六人山小屋に着いたが、すぐに煙い煙いと云うものだから、目的達成しない間に火が付いたか付かぬかわからぬ木々に水をかけることになつた。だが、動き回つたことでその頃は体が温まり、何で火を起そうとしていたのかわからなくなつていた。食事は六時半頃から。座る場所を作つたり、缶詰を

出して空けたり、これは彼の母がほとんど一人で準備した。私は残っていたお握りをほおぼり、幾つかの皿を漁った。岩木山神社前の商店で彼が買ったウイスキーを、見逃す手はないと私もチビリチビリなめもした。傍では若い人たちが食事の仕度をしているわけで、それを横目で眺めているのだから退屈には遠かった。七時近くには、二十前らしい五人の女性パーティが入ってきた。先客九人のいる山小屋ではとても無理と判断したのだろう、十分ほど休んだ後、ためらいも見せず彼女たちは雨のなかを発つて行った。

八時過ぎだろうか、外に出て見たら雲が途切れていて、月や星が出ていた。眼下の弘前は、巨大なクリスマス・ツリーでも見ているようで美しかった。彼の母と私は、この夜景を見ただけでも価値がある、と興奮した。

酒は、気持ほどには進まなかった。疲れが出て、ただ眠りたかった。彼はまだまだ飲み足りないようで、もう三十分つきあえと強引だった。彼と酒から解放されて、寝袋に入った時は半ば眠っていた。彼や高校生がいつまで起きていたかなどは、勿論知らない。

一時半。半ば汗ばんで、約束の時間にちょうど目覚めた。懐中電灯をさがし、もそもそ暗いなかを起き出した。彼の母も目覚めていた。外に出て見ると、雨は降っていないがひどく寒く、放尿しながら見下ろす弘前の街の灯は心細く、一つまた一つと、ポロンポロンと欠けて行きそうだった。雲でおおわれていると見え、星はなく、雨がすぐにもこぼれそうだった。

約束だからと、よく寝ている彼に一応声をかけた。彼は寝足りていなかったようで、起きたことに不機嫌だった。雨になるかも知れぬと報告すると、彼は明けてから出発しようと面倒臭げに云い、少しは酔いを残していた私も、早々にまた寝袋にもぐり込んだ。

※

五時三十分、外にはもう明るさがあった。トイレにたつて雪が降ったと知る。窓を少し開けてのぞいていたら、一人の登山者が声かけて通りすぎた。一時間ぐらい後には炊いたかゆで食事。残った缶詰と梅干しがおかずで、食べにくいと思ったが、おかゆのあったかさが何とも云えぬ落着きを生んだ。同じく泊った高校

生は七時に出発、七時三十分には私たちが追うように、少しだけ後片づけをして出発。

雪を踏みしめて、間もなく私たちは岩場に出たが、上を見上げると遠くないところに、三十分前に発った高校生たちの登って行くのが見えた。もしかしたら追いつくのかな、と思った。しかし、これは全くの認識不足で、その辺りへ私たちが辿り着いた時には、彼らの姿や声はどこにもなかった。

足を乗せるとずるつと行きそうな雪の上なので、私たちのペースはすっかり遅くなった。友人は、前夜の酒が残っているのか沈黙がちで、彼の母にもあまり手を貸そうとはせず、ひたすら見守っているふうだった。私は私で、前日の足の軽さはなかったが、少しは余力があるのか結構はしゃいでいた。

その岩場が尽きる辺りは、時計が十時を回っていた。まだ弘前が見下ろせ、唯一つの水飲場があった。霧が下から地肌をなめあげて来、休んでいる間に回りをすっかり包みもした。重い足を抱えて、未知の前に起つ私自身は、まさに別人に思えた。そして、彼から聞いた山小屋とか岩場、水飲場などの、一つのを経

る度に、未経験ながら目的地が確実に近づいていると半ば自動的に知覚するのは、これは、その場その場の気温や状況の変化があったからで、少なからず敏感な自身の存在を意識したのだ。

八合目にある山小屋が見え、小さな沼の前に立ったのは十時三十分頃。私は、岩や山小屋、氷った草などに焦点を合わせて、持っていたフィルム一本のほとんどを使い切った。手や顔はこごえそうな寒さだったが、下界にはない風景の中で心は妙に熱く、遅れはじめた彼の母が着くまでのその時間は私には貴重だった。母を気づかう彼の心配をよそに、突き上げられたおのれの心の高なりを聞いていたのだ。これは単に、岩木を征すと云うおごりだったのかも知れぬ。

「もう、私はこごでい……」

山小屋にそれぞれの背中の荷物を置き、ここできいと云う母を、彼がどのように納得させたか連れ出し、山頂に向かったのは十一時過ぎだろうか。すっかり雪の世界だった。風が出、下方から突き上げられた雪が私たちの顔を突き刺した。奇妙な平衡感覚に捉われ、私はしばしば立ち止まった。道ははつきりしていたが、

凍った足場の岩や石がぐらぐらしそうだったし、落石注意や危険の立札が随所にあつて、疲労した足を硬ばらせたのだ。左側はきりたった急斜面であり、その真下から吹き上げて来るような風は、注目してしまふと吸い込まれそうな味わたつたことのない恐怖を生み、浮遊感を並置させた。彼の母も、幾度となく足を止めたようだ。彼はつきつ切りになつて声をかけ、登りはじめるのをあわてずに待つふうだった。途中一ヶ所、平坦な箇所はあつたが、山頂近くはいまにも落石がはじまりそうな、畳み込まれそうな山道だったのである。

※

頂上は風が強かつたが、登り切つてしまふと風の届かぬ箇所もあつた。建物らしきものと云えば、わずかな風にでも飛んでしまふような神社とトイレぐらいのもので、気持の張りはなかつた。何れ雪雲のご真中に在ると云うのが実態なのであるうし、その認識が唯一の展望だろう、などと思ひながら、私は岩石と雪だけの湿っぽい頂上をせわしく動き回つていた。

頂上に向かつてから私が目にしたのは、小さな樹氷

とでも表現出来そうな凍りついた灌木、文字の消えそうな案内板、歴史を感じざるを得ぬ岩肌の色、あとは雪に叩かれて赤くなつた互いの顔ばかりだった。しかし、視野の途切れたその辺りからは、つねに絶壁がはじまつていることを思えば、少しばかりでなく異常なのであり、興奮で心が渦巻いた。事実、耳をすませば、風の音が普通ではない状態を展開していた。くぐもつた、足もとの地塊全体を呑み込んで揺れている音だった。

下りは恐怖のみだった。一時の吹雪は収まつていたが、白一色に近い岩場で、足を乗せても滑らぬ安定した箇所を索るのは本当に神経をつかつた。下からの止まぬ風、冷気は、恐れを誘う一因でもあるのだろうが、しかし同時に、心もとなない三人の神経を支えてもいなかったらうか。何れ私は、一步目を踏み出せばしても、その時自身の十歩目は全く想像出来なかつたのだ。上り下りとも三十分ぐらいいだつたわけだが、山小屋に降り着いた時はほつとして、のめり込んで行きそうだった。頂上にいた十分ほどの時間を除いて、友人やその母を気づかうことなど全く出来ぬ、そんな私の状態

だった。

十二時過ぎ、三人は山小屋で食事をした。私は果物、枝豆など、いろんなものを口に突込んだ。何でも食べるほど腹が空いていたが、全て一口と云った具合で量はいかなくなつた。それに、特に彼の母と私は、頂上征服の感慨に捉われていた。不機嫌に見えるほど言葉が少なかった。休んで数分も経たないうちに三人は、自動的に下山準備にとりかかつていたのだ。

コースは登りとは反対方向であり、地図上では鯨ヶ沢方角ではなかるうか。雲が切れて足下が見渡せ、海が見えた。後には頂上の風景が、現実とは思えぬ美しさを広げていた。また、左手には岩木の火口をのぞくことが出来たが、その断崖の底の方は靄でただ白く、不気味だった。いかなる時でも〈死〉がどんなものは私には説明出来ないはずだが、目眩が始まりそうなそんな場所こそ、ずっと人間に〈死〉を考えさせて来たのではなかるうか。

疲れて沈黙してはいても、帰りは暗くはなかつた。道そのものも迷いそうに思えなかつたし、時々を下を見晴せる箇所にも出た。雪を被つて濡れた土は、例え

滑つても、口笛の一つぐらひは吹けそうな気がした。そんな時こそ滑つたり転んだり、捻挫しかねない度合が一番強かつたはずである。道を塞いで笹の葉が垂れ下がっていたが、道が崩れたり掘られていたりする時はその笹につかまることが出来たから、滑りそうな足もとが逆に確かめられた。風に飛ばされなかつた雪が、つかまつた笹から小さな音を立ててこぼれ落ちるのは、それなりに風情があり、心なぐさめられた。

一時過ぎにはリフトの発着所に着いた。ここは有料道路の終点であるバス発着所でもあつた。食堂には人の姿があつたが、冬期と云うことで閉鎖された発着所にバスの影はなく、廃虚と云つた感じがあつた。私は販売機を見つけ、半ばあわてながら缶コーヒーにしゃぶりついていた。昨日はコーヒーが飲めなかつたんだな、としみじみ思つたのは、空缶を捨ててからだつた。そこからはまた笹やぶの道だったが、荒れ放題の感じだつた。良い道が出来、登山道に行く人が半減したせいだと思つた。時々、若者たちとすれ違つたが、彼らはいつも足早やに消えた。私たちは、やがてぶな林に入った。状況の変化に私はほっとしたが、しかし、

そのぶな林は延々と続いて、何時尽きるとも知らなかった。私はすっかりマイペースの歩きになり、遅れたり先を行ったりした。彼は途中、足をひねったとのことで少し足をひきずっていた。歩けないほどではなかったようだが、歩くペースを落したようで、私だけがしばしば先行した。

ぶな林の道は一時間ほど続いたろうか。キノコ狩りの人たちにも会った。モトクロスのコースでもあるのか、しばらくの間オートバイの音が高く低く響いてもきた。一定間隔でぶなの木に数字のある木札が下げられていて、一時はそればかりに神経を集中させられた。足は重くなる一方であり、もはや自分の足のようない感じがしなかった。少しずつながらの回りの変化に、へばったと繰返してはいても、少し休むと口だけは達者になった。

彼が元気になり、しゃべり出したのは、林を抜け出て人家が見えてからであった。山を下り切るまでは責任がある、と、痛い足をひきずって考えていたようである。登ってきた山を背景に私や母を立たせては、幾度かカメラのシャッターを押した。そこからの岩木山は、大

きな裾野を広げ、実に生々しく、以前から抱いていた印象よりも神秘的に思えた。

バスを待つ間、私たちは獄温泉の食堂に入って、ビールを飲み山菜そばを食べた。彼の母も進んでグラスを持ち、乾杯！ と大きな声を出した。

昨日の朝九時に着いて、帰りは弘前発十六時四十六分、三十二時間ほどの奮斗記であるが、彼は三十六才、私は四十八才、彼の母は六十といくつだったのだろうか。登山後の今でも私にとつての岩木山は、この私たちの年の差みたいになお手の届かない高さを持つ山に他ならない。

(二九八四・六・二五)

中岳にて

片津 森

曇り、所により雨という予報のなか、温泉施設ザ・

ブーン駐車場近くから登り始めた。馬返しまでの路にヒメシヤガがあちこちに群生していた。去年、女人堂に近づいたあたりで見たが、こんな標高の低いところでも咲くものかと思つてよく見ると、雨滴をのせて幾分重たげな風情だ。チゴユリ、ユキザサ、エンレイソウなども見た。

途中、左に立つ木の幹に空いたうろろが目についたので、腰を屈めてストックで中を突くと、小さな羽虫の群れがわーっと湧いてきた。何ダ、コレー！ ハエよりも小さいその一匹が、右目の脇の眼鏡のつるの裏側に止まったようだったので、指を差し込んで払おうとしたところ、一瞬、小さな爪で刺されたようなチク

ンとした痛みがあった。虫は飛び去つたがその痛みが残つた。

女人堂の見晴らしに着き、そこに居合わせた人目の辺りを見てもらうと、棘のようなものが刺さつていふという。やはりアイツの仕業だつたかと思ひ、余計なことなどしなければよかつたと自分のした藪蛇に呆れた。鏡も見ずに当て推量で取り除こうとする気にもならず、そのまま放つておいた。

さあて、と腰を上げて中岳へ向かおう思つた矢先、一人の男性が汗だくで登つてきた。そしてこちらを見るや、最近登つた山の話をしてきた。先週は矢島口から鳥海山へ登つてきたという。山に登る人、春スキーを楽しむ人など大勢でにぎわつていたらしい。雪の鳥海かあ、行つてみたいもんだなあ、とやる気をそられた。登りの雪面では頂を目指せばいい。下りは七ツ釜避難小屋や祓川ヒュツテを目当てに下ればいいのだからそうだ。

それから一時間かけて中岳山頂に着いた。木曾吉山神社横の繁みの裏の南側が大きく開けた所に腰を下ろして、おにぎりとパンを食べながら、しばらく遠く

に霞む山々を眺めた。そして、いつかもしたように、小さな社の観音開きの門かんにきを外して中に入ってみた。神前の古畳の上に手垢で汚れた参拝者名簿があったので、久しぶりに書いてみようかとページをめくっていると、記名以外の言葉があった。

「山の中より帰る処なし □」。

暮らしの世界に背を向けて登って来たような跡。いろいろあったんだべなあ……。その隣には「□さんへ帰る処は山の中なり」と、伝言板代わりに使ったそのページに共感の言葉が残っていた。二人は古くからの山仲間なのだろうか。はじめに書いた□さんは、後でこれを読んで気分が楽になったかもしれない。

下山途中、珍しくタケノコを見つけたので、二十本余り採った。下りながら、あの山頂は、二人にとつて特別な場所なんだべなあと思っていた。

山日記（平成十四年五月）より

注 □には漢字一文字が書かれていたが、支障を避けるため伏せた。

水田とツバメ（二三）

佐藤 ただし

山の境界杭

二月のある朝、家の近くの裏山を歩く。裏山は家のすぐ西側に位置し、標高は低いが、冬のこの季節は日本海から吹いてくる北西の風を防いでくれる。かつては尾根伝いに人が歩けるような山道があり、生活道として使われていた。

この裏山を切り裂いて出来たバイパス道を横切って山道に入る。その先には根笹山という地名の台地がある。今から四〇年以上前に、村の人たちが整備して公園としたところだ。ここで村の運動会が行われたことがあり、私も二回参加したことがあった。バイパス道のすぐそばからガードレールの付いた道路が広場まで

通っているが、今は笹が生い茂り、歩いて行くのも容易ではない。キツネのような足跡が続いている。人の背丈以上に伸びた笹をかき分けて、その足跡に沿って坂道を歩いて行くと、間もなく広場に出た。これも笹や萱が生い茂り、かつてここで運動会をしたとは思えないような状態になっていた。縄文時代の土器や矢じりや石斧などの石器が出土したというこの広場は全長五〇メートル、全幅は二〇メートルもあるだろうか。公園を作った記念に植えたと思われる桜が広場を囲っていた。広場の奥に当時建てられたトタン葺きのトイレが朽ち果て、倒れそうになっていた。

トイレの脇を通り、倒木を跨いで沢伝いに降りてゆくと杉林となる。いくら成長し太くなった杉の木が、急な斜面に静かに立っていた。何年か前に間伐のために伐り倒した杉が一本、足元に倒れていた。木に積もった雪を払い、ナップサックから出した買い物袋にタオルを入れ、木の上に置いて腰を下ろした。

この辺の山の一部は私の家の持ち山で、面積は一〇アール程だが、山の中は起伏があり、南側の稜線の反対側まで入る広さだ。昭和四〇年代に家を建て替えた

時は、この山の木を伐つて建てたという。またこの頃まで、雄物川で地引網漁をしていたが、漁で使う木船はこの山の木を伐つて作ったという。この山の入り口付近に船を作るために伐らずに残されていた杉の木があった。樹齢八〇年以上のその杉は昭和四〇年代の終わりに船を作り替えるために伐り、上流にあたる雄和の戸賀沢に運び、そこで船を作ってもらった。そして出来た船を川に下して運んできた。船は一〇年から一五年で作り替えていたという。

山の中は深閑としていた。近くの民家で植えた孟宗竹が山の法面の方に勢力を伸ばしていた。

山林であれ田畑であれ、次の世代に引き継がれて初めて、循環型の社会が続いてゆくということは分かっているのだが、さて自分が次の世代に引き継ぐようなことを何かしているかという、全く心もとない。私は田んぼを作ることは好きだったが、二人の息子たちに農作業をしると言ったことは無かった。自分のやりたいことをして暮らしてゆけばそれで良いと思っただ。どちらかという、鮭の稚魚が川を下り、海に出て、そこで何年間か過ごすという生き方が良いと思っ

た。生まれ育った川に戻るかどうかは別として、川を下らず、ずっと川で一生を過ごして欲しいとは思わなかった。

二人の息子はそれぞれ県外に就職し、そこで暮らしている。今後どのようになるかは分からないが、今はこのままでよいと思っている。

しばらく座っていると体が冷えてきた。立ち上がって、降りてきた山の反対側の斜面を登って行く。二〇年くらい前にシイタケのホダ木を並べていた場所が木立の中にあつた。自家用に栽培したこのホダ木は、山の稜線付近の檜の木を三〇本程伐って菌を打ち込み、杉と杉の間に間伐した木を渡し、立てて並べておいたものだ。三年ほど収穫したが、あとが続かなかつた。朽ちかけて残った二本のホダ木が時間の経過を物語っていた。

さらに斜面を登り尾根に出ると、稜線の少し凹んだ所に出ている一本の赤い杭が目に入った。山の境界を示す杭だ。ここから南側の下の方向に山の斜面と斜面が交わり、傾斜の無くなる平地の辺りにもう一本の杭がある。その杭とこの杭を結んだ線が境界になる。

今は花粉症の要因として歓迎されていない杉だが、かつては建築材としてだけでなく、稲の稲架掛けや建築の足場材として重宝されていた。また、杉の落ち葉は竈の焚き付けとして欠かせず、落ちている杉や雑木の枝を拾い集めるため、村人はよく山に入ったという。そうした時代に山の境界は非常に重要な役目をしてきたことだろう。今もその役目には変わりはなく、滅多に山に入る機会がなくなり、その存在を忘れてしまうところだった。

杉を植えた山は毎年少しずつ変化し、様子を変えてゆくが、この杭はそうした変化をやり過ぎるようにそこにあった。

辺りを見渡すと、隣接する境界の持ち主のことや、かなり前に杉を間伐したことなどを思い出し、山の静かな佇まいを感じて帰路についた。

雑記 (15)

横山 仁

去年の後半辺りから、Youtubeで、DHCテレビの「真相深入り！虎ノ門ニュース」など保守系？の番組をみている。番組説明には「震ヶ関・永田町の背後から、政治・経済・社会を斬りつける！ タブーなき憂国の志士たちが日替わりで繰り返し広げる生放送のダイリニューズショー！ DHCテレビから、新しいニューススタイルと世界の見方を、発信します！」とある。出演は、青山繁晴氏、百田尚樹氏、有本香氏、藤井厳喜氏、上念司氏、武田邦彦氏、須田慎一郎氏ら。

自民党国防外交部会の発言（部外秘）が、次の日には韓国メディアにダダ漏れしたというようなニュースが聞かれる。スパイがいるということだろう。（百田尚樹氏は、自民党は80%がクズだが、野党は100%

クズだ、といっているが、たしかに納得してしまうな）また、韓国海軍の駆逐艦が海上自衛隊のP-1哨戒機に火器管制レーダーを照射したというのは、次の日の韓国の新聞に載っていたともし。

1月8日の「虎ノ門ニュース」にゲストとして櫻井よしこ氏がでていて、「財政赤字」「国の借金」などで、消費増税に賛成の意見を言っていた。百田尚樹氏が、資産も1000兆あるといっても、借金は借金だから返さないといけないと、聞く耳を持たなかった。よほど、財務省のプロパガンダが効いているのだろう。

将来に禍根を残すのは、消費増税で経済を駄目にする（就職氷河期）方だ、とは青山繁晴氏。当然だな。

ついでに、いつもの「もりちゃん」さんから。2月8日。

（引用開始）

さすが時事通信。ポンコツ過ぎて腹痛い。政府債務を一人当たりで割ってどうすんの。こんなクソデマがい

つまで通用すると思ってるのかね。日本の債務はバラ
ンスシートで見るともう無いよ。

【国の借金 1100 兆円 = 1 人当たり 885 万円 - 財
務省 (時事通信)】 [https://headlines.yahoo.co.jp/
hl?a=20190208-000000094-jiji-pol...](https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20190208-000000094-jiji-pol...)

@MOF_Japan
(引用終わり)

おなじことだが、弓月恵太さんのツイッター。2月
9日。

(引用開始)
『国の借金 1100 兆円 = 1 人当たり 885 万円 - 財務省
(時事通信)』

国の借金ではなく、政府の負債である。

貸借対照表に「負債の部」がない政府や企業は、この
世界には存在しない。

IMF でさえ修正したのに、まだ情報操作を行う財務省
は、国家最大の詐欺集団である。

(引用終わり)

秋田魁新報の共同通信なども、元共同通信記者の青
山繁晴氏などによれば、取材も何もせず、たとえば米
国の新聞記事などをただ丸写ししているだけという。
丸写しならまだまして、誤解されるようにミスリード
しているとも。

たとえば米国のトランプ大統領が拒絶しているの
は、以下の③に関したことで、難民ではなく、不法入
国で、ソロスが金を出し、それを演出しているといわ
れる。

以下、弓月恵太さんのツイッター、1月23日。

(引用開始)

日本のマスコミが報道できないこと

①ヒラリーの悪事

→金融街と民主党の圧力

②ウイグルの惨劇

→金融街がIT企業に投資

③ソロスの移民マネー

→金融街の資金洗浄の仕組みがバビロン

④ダライ・ラマの来日

→チベットに関する中国共産党と金融街の癒着がバビロン

日米EUのラスコミは、金融街のポチ。

(引用終わり)

以上のことは、弓月恵太さんにかぎらず、いろいろなどころでいわれているが、ウイグル人にかんしては、監禁して殺し、臓器ビジネスもやっているともいう。同じく、弓月恵太さんのツイッター。2月26日。

(引用開始)

『ウイグル弾圧の「刑務所国家」中国で大儲けする監視カメラメーカー』

日米のラスコミは、常に米国民民主党の味方であり続ける。

民主党の票田である西海岸のIT企業が、中国のウイグル弾圧に加担してるなど、絶対に報道できないのだ。

さらに保守業界も、だんまりである。

(引用終わり)

また、弓月恵太さんから。2月26日。

(引用開始)

トランプ大統領が、不法移民の中に、麻薬密売社、反社会勢力、人身売買者がいることに言及した。

逆に言えば、これまでの米国大統領はガバガバだった

わけだ。

では、過去の犯罪者たちは、今米国内でなにをしているのでしょうか。

洒落になりませんね。

(引用終わり)

*

前号でもNHKにふれたが、弓月恵太さんのツイッターより。1月15日。

(引用開始)

『値下げで30億円の赤字へNHK』

国民から強制的に受信料を徴収して赤字など、経営が無能すぎる。

僅かな値下げで赤字になるのは、常識を逸脱した高い

人件費のせいだろう。

NHKは、使い道もない内部留保1兆円を国民に返金して解体しろ。

これ以上、国民に迷惑をかけるな。

(引用終わり)

NHKにかんしては、前号でも紹介した和田政宗氏のツイッター。1月31日。

(引用開始)

党総務部会。来年度赤字予算なのにNHK職員から理事になった人達の高額報酬をNHKに質問。職員から理事になるとNHK退職金4000万円＋理事報酬2200万円×2年＋退職金1000万円。2年で約1億円。4K8K放送の新CASチップも質問。これまでの事業者＋メーカー負担が、説明無く国民負担に(引用終わり)


とっとと、民間会社になるべきだな。ミスリード、フエイク放送局は。

*

百田尚樹氏のツイッターより。1月6日。

(引用開始)

【熱烈拡散希望】

『日本国紀』で驚いたのは、中国共産党の機関紙が名指しで批判したことだ。発売2カ月の日本の本を批判って… [注、前号ではこのサークが出なかった] もちろん国内の野党政治家、サヨク弁護士、大学教授、ジャーナリストたちからも攻撃を受けている。本を売る書店まで非難されている。

そこまでして読ませたくないのか！

(引用終わり)

1月9日現在、『日本国紀』は発行部数60万部というが、百田氏がもっとも書きたかったという戦後編

の監修は江崎道朗氏。「ヴェノナ文書」とか「デュープス」を精力的に研究しているが、「ヴェノナ文書」というのは、第二次世界大戦前後の時期に、アメリカ政府内のソ連のスパイがモスクワの諜報本部（コミンテルン＝共産主義インターナショナル）とやりとりした秘密通信で、トランプ・シークレットだったが、50年後の1995年アメリカ国家安全保障局（NSA）が公開した。ただしコードネームなので、人物の特定に時間がかかっているとのこと。ルーズベルトは、キヤプテン。なかには、モスクワ・東京間もあるが、日本のものは興味も時間もなく、やっていないらしい。

ちなみに、アメリカの保守派は、コミンテルンの工作によりルーズベルトが真珠湾攻撃を促した事実を知っている、とも。つまり、日本では、朝日新聞などをつかって反米をあおり、米国では反日をおおるプロパガンダを繰り返かえしていた。

繰り返かえすが、真珠湾攻撃については、日本軍がだまし討ちしたのではなく、仕組まれたものだったといわれる。『裏切られた自由』という、フーバーの回顧

録にあるらしい。草思社刊で上下あわせて1300頁ある(2017年)。

「本書は第31代アメリカ大統領ハーバート・フーバー(任期1929-33)が第二次世界大戦の過程を詳細に検証した回顧録です。誰もが避けたいと思っただにもかわかわらず、二度目の世界大戦が起こってしまったのはなぜか。そして、あの戦争についていまだ語られざる真実とは——。「正義の連合国」対「邪悪な全体主義国」という従来の見方を真っ向から否定する本書は長いあいだ公にされませんでした。2011年に米国で刊行され議論を呼んでいます。さまざまな情報にアクセスできたアメリカの最高権力者が、20年の歳月をかけて完成させた第一級の史料です。」

邦訳ができるまえにエッセンスを伝えようとして出されたのが、加瀬英明他編『日米戦争を起こしたのは誰か—ルーズベルトの罪状—フーバー大統領回顧録を論ず』(勉誠出版、2016)。それによればこうである。

「私(フーバー)は更に続けて次のように言った。
『1941年7月の(日本への)経済制裁は、単に挑

発的であったばかりではない。それは、例え自殺行為であるとしても、日本に戦争を余儀なくさせるものであった。なぜなら、この経済制裁は、殺人と破壊を除く、あらゆる戦争の悲惨さを(日本に)強制するものであり、誇りのある国ならとても忍耐できるものではないからだ』。この私の発言にもワッカーサーは同意した。」

反日感情が強かったルーズベルトは、「日本人の頭蓋骨はわれわれのより約2000年、発達が遅れている」といい、大統領令9066号に署名し、1942年日系アメリカ人12万人を強制収容所に入れた。「なんの補償も得られないまま、かれらは家や会社を安値で売り渡さなければならず、中にはすべての財産を失ってしまった人もいました」。(「」内はネットより)

*

天安門事件については、「映画評論家町山智浩アメリカ日記現場」ブログに、以下のような記事もあって、

どうかだと思っていた。

(引用開始)

2004-03-13 天安門広場での死者はなかった Add
Staratsushitanimoto (green)jiranjiran24wwwwave

インチキというものは、放っておくと、トンデモない
ことになるという話。

天安門事件を覚えているだろうか。1989年、北京
の天安門広場に集まった民主化を求める学生たちを人
民解放軍が虐殺した、とされる事件だ。

「とされる」としたのはウソだからだ。当時、現場に
最後まで残った朝日新聞の記者と、スペインの国営T
V局の記者が後に「学生たちは安全に広場から退去し、
一人の死傷者も出なかった」と証書のビデオを提出し、
世界のマスコミは天安門広場の虐殺は誤報だったと撤
回修正した（死傷者が出たのは広場の外である）。

詳しい資料です。

<http://sng.edhs.ynu.ac.jp/lab/murata/murata-tiananmen2.html>

これも追加。この記事がとてもわかりやすいのでぜひ
読んでください。

<http://gregoryclark.net/jr/page42/page42.html>

ここが重要なので繰り返す。

天安門「広場内」では一人の負傷者も出ていない。

NHK、朝日新聞その他、世界のマスコミは後に誤り
を認めた。

「天安門広場で虐殺はなかった」

(引用終わり)

ところが、次のような記事があった。岡田敏一氏の

「エンタメよもやま話」2018. 2.1 より

(引用開始)

さて、今週ご紹介するエンターテインメントは、韓国と共にあちこちの国々に慰安婦像を建てるべく、裏で反日工作を続けるあの国のお話でございます。

本コラムではこれまで「韓国軍が数千人ベトナム女性を強姦し、慰安婦にしていた…米国メディア『日本より先に謝罪すべきだ』」（昨年1月20日付、<https://www.sankei.com/west/news/170120/wst1701200001-n1.html>）や「韓国兵は3回も私を襲った…ベトナム戦争の残虐を英紙が報道、欧米で怒り・驚き噴出」（昨年1月24日付、<https://www.sankei.com/west/news/171124/wst1711240004-n1.html>）など（中略）

というわけで、今回も、こうした自国が犯した非人間的残虐行為や重大な戦争犯罪に対しては謝罪どころかそれ以前に事実すら認めないくせに、日本に対しては謝罪を要求する連中の欺瞞（ぎまん）を暴（あば）

く一件について、詳しくご説明いたします。

(引用終わり)

そして、「先ごろ英国で公開された外交機密文書によると」、「少なくとも1万人の一般市民が殺害されていたことが判明した」とあり、また、「2014年に明らかになった米の機密文書には、中国軍関係者の声として、中国共産党が天安門の大虐殺の犠牲者（死者）を1万454人だと考えていると記されていました。」とあった。

天安門広場内ではなかったとしても、虐殺は、行われたのだろう。

*

「南京大虐殺」については諸説あるが、「理解する世界史 & 世界を知りたい」<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~tajima/index.htm> から紹介する。

(引用開始)

・西尾幹二著「決定版 国民の歴史 下」(文春文庫、2009年) 460～462 ページに、次の記述がある。なお、太字および(注)は、当サイト管理人が施したものです。(引用者注、太字と(注)は省略)

『キリシタガフイールド』(注1)を北京政府が背後で指導していたことが世界に知られると、北京政府は突如旧日本軍の南京大虐殺を持ち出した。終戦から三十年後(注2)のことである。「南京大虐殺がこの時突然持ち出されたことを覚えておいてほしい」と念を押しているのは、先述(注3)の『争鳴』のレポートー高木氏(注4)である。

昭和十二年、まだ日米戦争の始まる四年も前の南京陥落時に何が起こったにせよ、右に示した(注5)、通例の戦争犯罪の枠内の出来事を決して越えないことはあまりに明らかである。

一九九五年六月、終戦五〇年の国会謝罪決議(注6)で揺れる日本を片目にみながら、中国の江沢民国家主席は訪中した海部元首相(注7)に、ドイツは謝罪し戦争について十分な認識を持っているのに、日本には

間違った認識を持っている人がいて、国連安全保障理事会常任理事国入りの障害になるだろう、とドイツを引き合いに出して脅しとも受けとれる言葉を告げた。

(中略)

あれ以来、ことあるたびに中韓両国が歴史認識問題で日本を威嚇し、日本政府が謝罪を繰り返しているが、まさはみなの知るとおりである。』

(引用終わり)

「へっぴりごし」さんが「もりちゃん」さんのツイッターを紹介している。2019年01月08日(火)

(引用開始)

もりちゃんさんの見立ては重要です。

それにしても立憲民主党って凄いいよね。あれから2週間経つのに韓国の一デー照射について全くツイッターで発信してない。党首の枝野さんも触れてない。安全保障に興味がない証拠ですよ。これが立憲民主党の本質だから。国防意識ゼロだから。政権なんて任せ

られる訳がない。@edanoyukio0531@CDP2017

— もりちゃん (CV: 毒蝮三太夫) (@mollichane)

2019年1月7日

(引用終わり)

消費増税(8%、10%への二段階引き上げ)を決めたのは悪夢の民主党在日政権じゃありませんか。

あとがき

◆雪の農道を歩いているとハクチョウの鳴く声を聞いた。空を見上げると、すぐ近くの上空を3羽の白鳥が北へ向かってゆくところだった。親鳥2羽と幼鳥が1羽。幼鳥の数が少ないと思った。この親子にもいろいろあったことだろう。無事に営巣地に帰ることを願った。(T)

◆前号で「秋田の詩祭」での松田甚次郎にふれたが、その前に「komayumi」35号(2017・12)で照内きよみ氏が松田甚次郎についてかいている。よんではいたが、関連していかなかった。ほけてきたかな? そのなかでは、宮沢賢治記念館に入ろうとしなかった吉田コトさんの言葉「ここにいるのは、宮沢賢治じゃないもの」が印象的だ。(J)

◆本を処分するため選別していると、時に同じ本が2冊あったりして苦笑する。当時よほど気になっていた本であったのだろうか。その割には中身を覚えていなかったりするから、単なる物忘れか。今更だが、こんなところにも自分の性格が視えたりして少々慌てる。(B)

◆2月下旬の昼過ぎ、某駅の待合室でバカ面してあんぱんを齧っていたら、マスクをした女子高生が一人、また一人と入ってきて改札からホームへ出て行った。パンを食べ終えて外へ出ると、別の女子高生が、待ち合わせていた家族の車に乗って去った。えっ、平日なのに? 彼女たちは3年生で間もなく卒業するのだろう。春の別れと門出を前に一生に一度の微妙な時期の中にいたのだと気づいた。(K)

「海市」 第15号

2019年3月15日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方